

日本語インターン派遣前研修の前後における研修生の意識の変化

福池 秋水

倉沢 郁子

要旨

近年、日本語教員の公的資格創設が議論される中、日本語教員養成課程における教育実習を通して教育実践の経験を積み、教員の質を確保する基本方針が打ち出されている。関西外国語大学でも、日本語教員養成課程の枠組みの中での教育実習と、その修了者が応募できる日本語インターン派遣に参加する場合はその派遣前研修と、2つの教育実習の機会がある。本稿では、後者のインターン研修に参加した研修生が、日本語教育についてどのようなイメージを持っているか、それについて教育実習がどのように影響するかをみることを目的とし、PAC分析を用いて調査を行なった。その結果、本人の積極性や向上心のある取り組み、また同研修の先輩派遣生との交流も貢献していると考えられるが、実習を通して経験を積むことで漠然とした不安が解消され、取り組むべき課題がはっきりしたこと、課題や改善点を自覚しつつ、まずは楽しむという考え方への変化が見られた。

【キーワード】 日本語教育実習、日本語教員養成、実習生、日本語教育のイメージ、意識の変化

1. 研究の背景

近年、日本語教員の公的資格創設が議論される中で、日本語教員養成段階で教育実習を通して「実務に必要な教育実践の経験」を積み、教師の質を確保する基本方針が打ち出されている（文化庁 2022b）。関西外国語大学（以下「本学」）においても、日本語教員養成課程（以下「養成課程」）が設置されており、筆者らも養成課程の科目を担当したり、またはその枠組みの中の「日本語教育実習」を通して実習

生への指導をする機会がある。令和3年協力者会議報告では、日本語教師の資格取得に当たり、「日本語教師に必要な 技能・態度に含まれる実践力を身に付けるため、教育実習を履修することが必要」（文化庁 2022a）とされており、知識ではなく技能と態度の育成が教育実習の目的とされている。技能は授業見学や教壇実習から習得できるであろうが、では、教育に向かう態度はどのように育成され、変容しているのだろうか。

日本語教育実習生の学びの変容に関する先行研究には、才田（2003）がある。これは、PAC 分析（内藤 1997）を用いて、教育実習生（学部レベル、教師経験のある大学院レベル）と現職教師の3名を対象に「日本語授業」に対する態度を比較したもので、授業イメージの具体化の度合い、学習という行為に誰が関わっているのかにそれぞれ違いが見られるとしている。具体的な教室のイメージがまだはっきりしていない学部レベルの実習生に対し、大学院レベルの実習生は、教室活動の目的や、学習者の視点を考慮にいたしたクラスの雰囲気にも言及した。さらに、現役教師においては、学習の主体としての学習者の存在を意識した発言があったという。才田（2003）に見られるような、教師としての経験の違いによる変化は、「経験からの視点の広がり」ととらえることができる。このような視点の広がりや、教育実習を経験することでも得ることができるのだろうか。本研究では、参加者の意識がこの養成段階における教育実践の経験を通じてどのように変容するのか、教育実習生は、日本語教育についてどのようなイメージを持っており、それについて教育実習はどのように影響するかを見ることを目的とした。

2. 本学における教育実習の位置付け

上記の通り、本学では、日本語教員養成課程の中で日本語教育実習を行なっている。日本語教員養成課程には、学部により多少の違いがあるが、「社会・文化・地域に関する科目」「言語と社会に関する科目」「言語と心理に関する科目」「言語と教育に関する科目」「言語に関する科目」が設定されており、それぞれ修得単位数に規定があるものの、全体で54単位履修が修了要件となっている。

「言語と社会に関する科目」の中で、英語キャリア学部と外国語学部では「日本語教育実習」もしくは「日本語教育実習演習」が、英語国際学部では「日本語教育実習演習」が履修可能で、実習演習が履修者同士による模擬授業を通して日本語指導

の演習が行われるのに対し、「日本語教育実習」では実際に教壇実習を行う。「日本語教育実習」を履修するためには、3年次終了時の成績、学内成績、英語力等の履修要件を満たすことが必要である。日本語教育実習の期間は3週間で、本学留学生別科の授業を見学をしながら、教員の指導のもと、教壇実習の準備を進める。

この日本語教員養成課程の修了候補者の中から、本学の日本語海外インターン派遣制度を用いて、卒業後に海外の提携校へ日本語をTA (Teaching Assistant) という立場で教える機会に応募する者もいる。この派遣制度の選考に通った派遣候補生は4週間の派遣前研修(以下「インターン研修」)を受けることが義務付けられている。インターン研修では、教育実習と同様、留学生別科で行われている日本語の授業の見学、そして教員の指導のもと教壇実習を行うが、前半と後半の2週間ずつで異なる教員の指導を受ける。本稿では、養成課程における日本語教育実習及びこのインターン研修を「教育実習」と捉えることとする。

3. 調査方法

3.1 PAC 分析について

本調査は、内藤(1997)に従い、PAC分析を用いて行った。PAC分析は「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、当人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者(実務者)による総合的解釈を通じて、個人別にイメージ構造を分析する方法」(内藤2000)で、この手法を用いた理由は、調査協力者が研修中に自らの意識・態度について振り返りながら語るためである。

3.2 PAC 分析の実施方法

PAC分析の実施に際して、PAC-Assist2(土田2016)を使用し、次の手続きを行った。当該テーマに関する以下の連想刺激文を文書および口頭で提示した。

「日本語教育に携わっている時のことをお聞きます。その時あなたは何をしていますか。またどんなことを考えたり感じたりしていますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、単語か短い文で思いついた順に書いてください。」

連想反応を記入し、さらに重要度、及び各連想反応のイメージがプラス (+) か、マイナス (-) か、どちらでもない (0) かを入力してもらった後、PAC-Assist2 の類似度比較で、連想反応で出た項目間の距離を 10 段階で評定してもらった。それを基に非類似度行列を作成し、統計分析ソフト「R」を用いてクラスター分析 (Ward 法) 行なった後、デンドログラムを作成した。作成したデンドログラムは、調査協力者と視覚的に確認しながらクラスターが包含するイメージや解釈などを確認し、半構造化インタビューでは、各クラスター間関係の比較を行なった。

面接は筆者らの研究室で行い、記録のためにインタビューの音声録音した。録音したものを文字起こしした資料および本論文の草稿は調査協力者に見せ、内容が本人の意図しないものではないことを確認してもらった。

3.3 調査期間と調査協力者

本調査は、日本語海外インターン派遣制度の選考に合格後、派遣が内定し、4 週間の実習に参加したインターン派遣候補生 (以下「派遣候補生」) を対象に、PAC 分析、およびフォローアップインタビューを、インターン研修の前後に行った。調査期間及び本稿で報告する調査協力者 A の詳細は、個人の特定を防ぐため、本稿では言及しないこととする。

また、派遣前研修に参加する前に、教育実習に参加し、派遣前研修が実質 2 回目の教壇実習となることを改めて言及しておく。

4. 分析結果と解釈

4.1 インターン研修前の PAC 分析

4.1.1 各クラスターについての本人の説明

インターン研修前の PAC 分析で得られたデンドログラムを図 1 に示す。派遣候補生 A からは 22 の連想項目が挙げられ、調査者と A とでクラスター分析の結果を確認しながら、4 つのクラスターに分けた。調査では、4 つのクラスターそれぞれについて、そのクラスターがどのようにまとまっていると感じるかをまず尋ね、命名してもらった。その後、それぞれの比較を行うことで各クラスターの特徴を明確にすること、補足質問でより詳細な語りを引き出すことを試みた。以下に、本人による各クラスターの解釈を中心に、他のクラスターとの比較と補足質問への答えを

まとめる。

第一クラスターは、「自分の説明を理解しているか心配（－）」「本当に自分が正しいのか不安になる（－）」「緊張する（0）」「急に疑問が浮かぶ（0）」「日本語の間違いを直さなければならない（0）」「すべての文法が頭に入っていない（－）」「自分は間違った日本語を使ってはいけない」「質問が出るのが少し怖い（－）」の8項目から成る。なお、本論文では、連想項目の項目の後の（ ）に、本人による「＋・－・0（どちらでもない）」のイメージを付記した。

このクラスターについて、Aは以下のように述べた。以下、「I」は調査者（インタビューア）を表す。フィラーや言いよどみ、口語的な言い回しの一部は適宜修正・省略し、特に調査者の発話は一部省略・要約する。

マイナスのイメージ。自分が、ほんとに、常に、心配していること。(I:ほかには?)自分が、もし、このことをしてしまったときに、すごく反省してしまうっていうか、負に思っている、あまりよくないと思っている。日本語を教えるにあたって、この、例えば、「理解しているか心配」っていうのは、理解もしてないまま進めてしまったら、絶対に、悪い影響が学生さんに及ぶかなって思って、学習者さんにとって悪いと思っていることがまわっているかなって。

第二クラスター「目標」は、「質問をして会話を広げる（＋）」「生徒と教師の間の会話練習（＋）」「生徒にたくさん日本語を話してほしい（＋）」「信頼関係が大切（0）」「楽しみながら授業を受けてほしい（＋）」「話しやすい雰囲気づくり（＋）」の6項目から成る。

イメージは、ワイワイしたイメージ。明るく授業が行われている感じ。で、関連としては会話とか話すことによる関連があるかなって。どんどん、教師、教員と、学習者さんの、授業内でのつながりとか、関係性。私が、授業をするに当たって大切だと思っていること。

第三クラスター「日本」は、「日本文化について発信する（＋）」、「日本を好きになってもらいたい（＋）」の2項目のみであった。

学習者さんに、日本を、全体を、好きになってもらいたい、日本の文化とか、日本語も含め、全部を知ってもらいたい。(I:日本全部を知ってもらいたい?)全部を知ってもらいたい。日本語から入った、日本語から日本のことを知った人でも、ポップカルチャ

一とかのアニメから日本を知った人でも、まとめて、日本についてを知ってもらいたい。少しでも多く。(I:あとはどんなイメージが湧いてきますか。)日本の文化だと思って、海外で例えば、お寿司とか空手とかだったとしても、ほんとの日本の文化とは、ちょっと、かけ離れたものが広がってるって言う現実もあるから、本当の日本の文化、正しいって言ったらあれだけど、本当の、日本人がしている文化っていうのも広まればいいかなって思いました。

第四クラスター「**現実**」は、「時間が過ぎるのが早い(0)」「たくさんのレリアアを使う(+」「わかりやすい教材(+」「教えるのは大変(0)」「わかりやすい授業がしたい(+」「教案作成が大変(-)」の6項目から成る。このクラスターについて、Aは以下のように説明した。

実際に、教育実習などで、他の先生方の、先輩先生方の、授業を見ていたりしたときに、気づいたことや、大切にされていること。例えば、たくさんのレリアアを使って授業を作っている先生方もいるし、わかりやすい教材を自分で作っていらっしゃる先生方もいて、まとめて言うと、教育実習での、自分が実習で前に立たせてもらった時に、思ったことだったり、実際に自分が体験した中で気づいたこと。自分が体験するまでは、あまり気づかなかったこと。

4.1.2 クラスター間の比較

クラスター間の比較について、本人の説明は以下のとおりである。

(第一クラスター「不安」と第二クラスター「目標」の比較)

似てないのは、マイナスイメージか、そうでないか。同じなのは、下の部分では部分的にはなるけど、その「信頼関係」っていうのが、上は、これも、マイナスイメージのほうでは、このことが全部できなかつたら、その信頼関係が築けない。ていうこの信頼関係っていうのがちょっと入ってるかなっていう。(I:似ているところもありますか?) 似てるところは、思いつかないです。

(第一クラスター「不安」と第三クラスター「日本」の比較)

似てないところは、1は、授業とか日本語におけることについて。でも3番目は、日本語についての分類ではなくて、全体についての。日本語の、言語についてだけではない。(I:似ているところもありますか?) 似てるところは、思いつかないです。

(第一クラスター「不安」と第四クラスター「現実」の比較)

似てるのは、授業中の中でのことであること。で、似てないのは、1番は、絶対にしないといけないと思ってることで、で、2番目[第四クラスターのこと]は、感想に近い。

(第二クラスター「目標」と第三クラスター「日本」の比較)

似てるところは、授業内にこれがあればもっと良いと思うこと。例えば2だったら、もっと会話練習があって、良い雰囲気を作ってあげられるようなことができればもっといいんじゃないかって言うのと、3だったら、その日本文化を授業内に入れて、もっと楽しい授業を、例えば漫画とかを取り入れてもっと楽しい授業にプラスになることができるんじゃないかと言うこと。で、あまり似ていないことは、文化について、と、会話について。2番が、会話についてのことを多く言っているけど、3番が文化についてのこと。

(第三クラスター「日本」と第四クラスター「現実」の比較)

似ていないところは、完全に別の話であること。日本の文化とか伝統好きになってもらいたって言うのと、4番みたいな、感想である事と全く別のもの。(I:ということは、似ているところは…) ないです。

4.1.3 補足質問

本人によるクラスターの解釈や比較を踏まえ、追加で補足質問を行った。

まず、第一クラスター「不安」と第四クラスター「現実」について尋ねた。

(I:第一クラスターについて「しなければならない」ということだったが、第四クラスターについてはどうか。) 4のことも、しようとは思いますが、1の方が、それをしなかったら致命的というか。もっと重点をおかないとダメなんじゃないかなって。4番は、まあ、わかりやすい授業がしたいとか、たくさんのレアリアを使うっていうのもするべきだけ。 (I:より良く?) そうですね、なんか、1のほうがもっとそこは欠かせないって。 (I:1は欠かせない。1は、大きい?) 1はでかいですね。自分の本当の気持ちとか、本当に考えている、いちばん、本当に思ってるところが、1。

第一クラスターについて、「連想項目は、これまでの教育実習などの経験から来ているものか」と問うたところ、以下のようなエピソードが語られた。要約し箇条書きで示す。

- ・学習者からの質問に答えたとき、その場では「わかりました」と言っていたが、後日、再度確認するともう忘れていた。自分の説明が悪かったのではないかと心配になった。
- ・(教育実習中の教壇実習で) 自分が担当した文型の部分の宿題を添削しているとき、同じ間違いがいくつも見られた。もっとわかりやすく説明したほうがよかったと思った。
- ・自分が普段使えている文法でも、学習者が学んでいる変換方法でどう説明すればいいか心配になることがある。
- ・前に立って教えるのも緊張するし、とっさの質問にも答えられるかどうか緊張する。自分が不安な顔をすると学習者も不安にさせてしまうような気がする。

第二クラスターについての補足質問では、連想項目に「会話」や「話す」という語が出ていることについて確認した。Aは次のように答えており、語学学習者としての自らの体験から、語学教育観の中で会話を重点的に考えていることを示した。

(I: 第二クラスターなど、会話に関することがよく出てきているが、会話を重視しているのか、それとも、これまで見学したクラスが会話中心だったからか) 多分この会話ってというのが大きいのは、私自身が、会話とリスニングをいちばんしたい。今まで学ぶので。私だったら英語?でリスニングと、会話がいちばんしたいって自分が思ってたので、それが大きくなっちゃったかもしれないです。

インタビューの最後に、日本語を教えることに対するイメージと、将来目指す日本語教師像について尋ねた。

(日本語を教えることに対するイメージ)

(I: 日本語を教えるとは、何をすることだと思いますか) 日本語を教えるのは、日本語を学ぶ理由が様々だと思うので、その日本語をなぜ学びたいのかに合わせて、教えるべきものだと思って、例えば、日本で働きたいからだったら、もっと、学習者さんも、真剣な姿勢で学ぶ人が多いので、それに合わせた授業をするべきだと思うし、もし、アニメとかで日本語を勉強してるんだったら、ビジネス系は、しなくてもいいって言う人もいると思うし、そういうのを大切にしながら教えるべきだと思います。

(将来目指す日本語教師像)

まず一番に、クラスが明るくなるような先生。先生自身が、常に笑っているような、不安を感じさせないような先生になりたいです。で、最終的には、どんな質問でも、不安なく答えられるくらいの経験値を持つて先生になりたい。(I:それは今できてますか?) うん…。まだ私自身が緊張してるから、引きずったり、生徒の質問に対して、答えなくて、顔が曇ったりっていうのがあるんで、それは、なくなるといけないと思ってることでもあるし、もう、何か、問題があっても笑顔で行けるくらいの精神力がある先生。(I:明るくなるというのは、性格的なことと、精神力と…) 精神力と、自信と。(I:じゃ、質問されても顔が曇らないということは…) ちょっとポジティブに捉えられるような、あー、こんな質問が来た、じゃ、それを学べたって思えるような。

4.1.4 インターン研修前インタビューのまとめ

本人の説明の中では、特に第一クラスターに関わる部分で頻繁に「絶対しないといけない」「しないと致命的」「欠かせない」「本当の気持ち」などの強い言葉が用いられ、「不安」が気持ちの中で大きくなっていることが窺えた。第一クラスターの「不安」に含まれる連想項目のイメージは、「マイナス」と「どちらでもない」が半々で、「プラス」が1つもない。一方、他の3つのクラスターでは第四クラスターの「現実」の中に1つだけ「マイナス」があるほかは「プラス」か「どちらでもない」であり、Aが日本語教育に関わることに對して抱くマイナスの思いのほとんどが「不安」に集約されることを示している。他の3つのクラスターでは、学習者とよい関係を築いて楽しい授業を作りたい(第二クラスター「目標」、日本を好きになってもらいたい(第三クラスター「日本」、そのために具体的にしなければいけないことは何か(第四クラスター「現実」という前向きな態度が表れている。補足質問でも、「日本語を教える」ということのイメージについて「学習者のニーズに応える」ということを第一に挙げ、将来の日本語教師像として「クラスが明るくなる、自信を持った先生」という目標を持つなど、学習者主体の明るい授業ができる教師という目標が明確に示されていた。

このように、インターン研修前のインタビューからは、研修生Aは研修の直前の段階では、「学習者が楽しみながらたくさん日本語を話すような授業づくりをしたい、日本語や日本文化について知り、好きになってもらいたい。」という思いを持ち、「教案づくりの大変さ」「レアリアや教材を駆使してわかりやすい授業を作る」という現実的な作業に取り組みたいと考えながらも、実際に授業をすることを想像すると日本語教育に関わることに大きな不安や緊張を抱いていたこと、その不安や

緊張の裏には「教師は誤った情報を伝えてはならないし、質問には自信を持って答えなければならない」という責任感があることが窺える。不安や緊張を抱えながらも自分の考える理想の教師像に向かって前向きにインターン研修に取り組もうとする態度が読み取れた。

4.2 インターン研修後の PAC 分析結果

4.2.1 各クラスターについての本人の説明

候補生 A に対してインターン研修後に行った PAC 分析の結果を図 2 に示す。研修前の分析と同じ手順で、A から挙げられた 16 の連想項目について、デンドログラム図を A 本人と調査者とで確認しながら 4 つのクラスターに分けた。それぞれのクラスターの命名と本人の説明は以下の通りである。

第一クラスター「**アイディア**」には、「漢字（－）」「たくさんの先生方の授業を見てみたい（＋）」「言語は難しい（＋）」の 3 項目がある。

(I:何か連想する風景とか場面とか。) 後ろから見てる感じ。先生の、ほかの先生の授業を。(I:教室の後ろで、授業見学しているような感じ?) そうです。(I:ほかにどんなイメージがありますか。) なんか、いいところをとろうとか、自分もやってみようとか、学びたいとか、なんというか…。個々でもいいですか。漢字とかだったら、先生によって教え方が違ったから、もっとたくさんの授業を見て、いろんな方法で自分に合った方法見つけたいなどという感じです。で、「言語難しい」というのは、漢字を入れることによって、日本語さらに難しくなるから、その、日本語の文法もむずかしいのに、漢字をプラスするっていうことでどんどん難しくなるかなっていうのがあります。(I:このグループに名前をつけるとしたら、どんな名前をつけますか。) さっきも言いましたが、アイディア。(I:アイディアってというのはどういうイメージのことば?) ほかの先生たちがしていること。だから、いろんな、その人たちの、それぞれのアイディアを自分が、盗みたいって言ったらあれだけど、取り入れたい。自分が吸収したい。それは、ひとりだけのアイディアでは、言語を教えたりするのは難しいと思うって意味で、全体的にみたら、アイディア?漢字にも教えるアイディアが必要だし、たくさんの先生のアイディアを盗みたいっていうのもあるし、アイディア次第で言語の難易度変わるかなって。

第二クラスター「**疑問**」は「質問に正確に答えたい（＋）」「常に新しい疑問や課題がある（＋）」「学習者さんがしっかり理解しているか確認したい（＋）」「授業後の学習者さんとの立ち話（＋）」の 4 項目から成る。

うーん…。授業後の学習者さんとの立ち話っていうので、学習者さんと、すごい、話したりっていうか…。いつも、数名が教室に残って先生と話してるっていうイメージが私の中であって。それはふつうに質問だったりいろんなことだと思うんですけど、私の中で質問が多いかな、って感じて。で、そこで、わからないことがあったときに、質問してきてくれるから確認もできるし、そこでプラスでも答えたりできるのかなっていうのがあります。で、「質問に正確に答えたい」っていうのは、質問をされた時に、最近だったら、「あ、そんなこと気づかなかった」とか「あ、それ、自分はちゃんと理解してなかったな」って思うことを見つけたときに、面白いと思うし、それにプラス、正確に、自分がちゃんと理解した上で答えたいなっていうのもあるし。(I:じゃあ、名前をつけるとしたら?)
うーん。「疑問」。(I:疑問というのは A さんにとってどういう意味の言葉ですか。) うーん…。プラスにもなるしマイナスにもなる言葉。プラスで考えたら、また新たなことが学べるっていう風に考えられるけど、マイナスで見たら、わからないまんまでいたら、自分がしっかり理解できなかつたり、どんどんマイナスになっていくんじゃないかな、ひとつマイナスがあると。でもプラスになればどんどん上がっていきけると思う。

第三クラスター「マイナス」は「緊張する (－)」「導入が苦手 (－)」「教案や PPT を作るのに時間がかかる (－)」の 3 項目から成る。

まとまっているのは、自分にとってマイナスに感じていること、でまとまっているかな、って思って。で、「導入が苦手」だから、より「教案や PPT を作るのに時間がかか」っているのかな、って思って、で、じゃあ、導入がいちばん大切なんじゃないかなって自分で思ってるので、すごく、それが始まる時とかには緊張したりするし、授業の始めっていうのがすごく緊張するかなっていう。いちばん始まりの、あいさつの時が、いちばん緊張する。導入を始めるのが。(I:何かそれで思い出すことはありますか?) 導入…、この時っていう特定はないんですけど、常に、やっぱり、始めっていうことが、始めだから苦手なのか、導入が苦手なのかわかんないんですけど、自分は、始めのほうが、苦手かなって思うし、だから、さっきも言ったように、用意、その部分に時間がかかるかなっていう…。

第四クラスター「笑顔」は「反応がいいと嬉しい (+)」「もっとアクティビティを取り入れたい (+)」「言葉を選ぶ (+)」「教壇に立っている (+)」「日本語で話す (+)」の 5 項目である。

これで思い浮かぶのは、私はたぶん笑顔になっているし、たぶん学習者さんも、笑顔になっている場面が想像できて、で、授業のどの部分っていうのはないんですけど、もう

ずっと、授業全部を通しての、イメージ。これがまとまっている理由は、これをさっきの項目とくらべて、プラスのイメージが私にはあって、で、よりいい授業にするために、自分のプラスに思っているようなことがまとまっているかなって思います。(I:それをしてる自分は思い浮かびますか?) そうですね。うん。(I:どこにいますか?) 教壇にいます。(I:ここの?それともインターン先の?) 教育実習の。関西外大の教室で。(I:「この場面」というところがありますか?) この場面っていうところはあんまりなくて、通して、授業全体なんですけど、強いて言えば、アクティビティかなとは思いますが。ここに入ってるみたいない感じで。アクティビティの時に、その、ペアでやってもらった後に、私が前に立って聞いたりしてる時になんか笑顔だったりしてる時のイメージが強いです。(I:楽しかった?) 楽しかった。

4.2.2 クラスター間の比較

クラスター間の比較について、本人の説明は以下のとおりである。

(第一クラスター「アイデア」と第二クラスター「疑問」の比較)

共通してることは、難しいっていうところ、共通してるかなって思います。それは、アイデアのほうは全体的に、自分ですべてをできないって思ってるから、助けてもらおうとか、ほかの先生からのアイデアをもらおうって思ってるので、一人ではできない難しさっていうのがあるんですけど、例えば質問に対しても、一人で答えられるものと答えられないものがあって、そういうところ少し難しいし、そういう一人でできない、かもしれない?っていうところが似てるかなって思う…。で、似てないところは……けっこう「疑問」のほうは質問系の言葉が並んでるかなって思いますけど、「アイデア」のほうは、あまり質問って言葉ではない。

(第一クラスター「アイデア」と第三クラスター「マイナス」の比較)

似てるのは、難しいって自分がちょっと感じてるかな。難しいとか、緊張するのも、難しいと捉えれば、捉えられるのかなとか、思ったりします。(I:緊張するのは難しいことですか?それとも、難しいから緊張する?) 難しいから緊張します。導入が苦手っていうのも、導入を作るのが難しいって感じてるから、苦手、かな…。で、似てないのは…思いつかないです。……似てないのは、「アイデア」にはちょっとプラスがあるけど、「マイナス」のほうには、あまりプラスになるイメージがない。私の中で。なんて言ったらいいかわかんないんですけど…、「マイナス」には、その、自分がプラスに感じるものが全然ない。もう、導入が苦手だからマイナス、緊張するからいや、とか、教案作るの時間かかるからちょっと、みたいな。マイナスはマイナスで、もう全部マイナス。だけどアイデ

ィアのほうは、まあ、漢字ができればもっと日本語が上手になれるし、話すだけじゃなくて書いたり読めたりできるし、たくさん授業が見たいのは、もっと自分が、自分自身が成長したい。で言語は難しいけど、クリアしたらもっといい仕事じゃないけど、もっと自分がレベルアップできるとか、プラスになる、とか。

(第一クラスター「アイディア」と第四クラスター「笑顔」の比較)

似てるところは…。あんまりないかなあ。(I:違うところは?) 違うところは、その、自分の授業してるところが想像できるかどうか。「アイディア」のほうは、本当にその、なんだろう…感じるじゃなくて…。授業見てみたいなあとか、難しいなあとか、漢字、この、単語ですけど、難しいとか複雑とか、いろいろなことを思ってるんだけど、思ってるだけ。自分は、そう思っている。けどこの、「楽しい」のほうは、自分がこの、教壇というか、前に立ってることが想像できる言葉が並んでる。

(第二クラスター「疑問」と第三クラスター「マイナス」の比較)

似てるところはなくて、あんまり。で、似てないのが、本当に、この、題になっているとおりに、これは質問に対してのことなのかと、あとマイナスのイメージなのかってことで分かれてるんじゃないかなって思います。(I:さっき「アイディア」と「疑問」を比べたときは、「疑問」は「疑問」に特化してると。) そう。完璧に違うなっていうのが、自分の中では、あります。(I:どう違うか、もう一回、いいですか。) 疑問のほうは、質問ってというのが、…その全体的に質問ってというのがあるんですけど、その、学習者さんからの質問とか、あと常に新しい疑問や課題ってというのは、その自分の中で疑問や質問って書いたら、自分の中にも質問がある、常に。で、この「学習者さんがしっかり理解しているか確認したい」というのも、できてるのかなっていう疑問がある。で、授業後の学習者さんとの立ち話で、この前の研修の時に、学習者さんと先生の話を見てた時に、先生に、こういうことできたんだよっていうのを伝えて、で先生が、あ、そうなんだ、使えてよかったね、みたいな、勉強してよかったねっていう話をして、そういうところで、自分が感じる、その理解できてるのかなっていう質問とか疑問がクリアになったりするから、本当にここは、疑問とか質問?自分も… (I:学習者から「先生これ何の意味ですか」という質問だけじゃなくて、それを通じて自分にも問いかけがあるみたいなのが「疑問」?) うん、うん。(I:それに対して「マイナス」は?) マイナスは、その、相手は存在してなくて、自分自身の葛藤?そのマイナスな気持ちとの葛藤がある。

(第二クラスター「疑問」と第四クラスター「笑顔」の比較)

似てるところは、その、疑問がなくなったときに楽しいっていうかうれしい、っていうのはあるし、それを、質問、その、自分自身の疑問がなくなった時もだし、学習者さんの疑問がなくなった時もだし、うれしかったり、楽しいって思ってもらえたらうれしいとかっていうのが似てるかなって思います。あ、あと、似てるところ、自分の想像できる。その、話してる場面が想像ができるっていうところが似てます。疑問のときも自分が想像できます。あと、話してる。で…似てないところは…。似てないところは、質問、疑問のほうは、本当に質問されてるっていうイメージが強いけど、「楽しい」のほうは、私が、一方的じゃないけど、私がメインになって、話してるっていうことかなあって気がします。(I:ほかにはどんなところが違いますか。) 違うところで、イメージは、「疑問」のところは、英語のほうが多い、多く使ってるような想像ができます。でも、こっちの「楽しい」のほうは、日本語のほうが割合が多い気がする、自分が発している言葉とか、学習者さんが発している言葉とか。

(第三クラスター「マイナス」と第四クラスター「笑顔」の比較)

似ているところは…ない。(I:違うところは?) 違うところは…。これ、「マイナス」っていう項目が私の中でいちばん強いんですけど、固定的な考えなんですけど…。「マイナス」は、マイナスなイメージ。で、「楽しい」は本当に「楽しい」なんで…。もう、完璧に違うんです。(I:真逆の感じ?) 真逆、そうです。緊張するのと、うれしいは、全然違うと自分の中で思ってるし、あんまり、楽しいっていうのを考えた時に、たぶん、「楽しい」のほうに自分の考えがなる時は、導入も全部うまくいった時だし、あんまり「苦手」っていう言葉を考えてないと思うんですよ。だから、もう本当に、プラスマイナスの差です。

4.2.3 補足質問

事前インタビュー同様、補足質問を行った。項目の中で、「**教案や PPT に時間がかかる**」について具体的なイメージを尋ねると、以下のような回答であった。

教案、が大変なのは、それはもう常なんですけど、実習の時もあるし…。パワーポイント(以下、PPT)を作るっていうのは、その、アニメーションとかをつけるのが、すごいイメージがあって、授業で使う時の PPT というのが。で、それが出来てなかったらもう授業自体が成立しないというか、ずれてるだけで授業ができないとかそういうのもあるので、しっかり確認とかもしないとだめで、すごい、簡単に作れるもんじゃないっていうのがあって…。で、たぶんこれを今書いたのは、その、インターンの時に、先輩の PPT とかがなくて、私が全部作ることになるので、教案とか PPT を作るのに時間かかるなって今ももう常に考えてしまってる…。(I:インターンに行ったら大変だろうなって、考えてし

まう?) すごく、そればかり考えてしまってるので、最近。でも、やろうと思っても、どれぐらいかわかんないし、どれを、何を準備したらいいんだろうって思っちゃうんで、だから時間かかるけどできないっていう。(I: 今頭に浮かぶ、インターンに行って大変だろうなって思うことは、教案と PPT?) 教案と PPT が、いちばんですね。あと、でも、自分の英語力でできるのかなっていう不安もありますけど。(I: 授業をするときに大事なものは、教案と PPT と、英語?) うん…。教案と PPT っていうのも、その 2 つっていうより、いちばんまとめると、前の準備? 準備がいちばん大切。(I: 準備のイメージが PPT と教案?) そうです。(I: 準備って他に何があります?) なんか、質問が出そうなことを考えたり、それに対応できるようにしたり、あと、その場所によって、こういう PPT が使えなかったりしたらどうしようとか、レベルがバラバラだったら、それをもう既習済みだった学習者さんは何をしたらいいのかとか、別の課題を考えたり。

次に、事前インタビュー同様、「日本語を教えることに対するイメージ」と「目指す日本語教師像」について尋ねた。

(日本語を教えるということ)

日本語を教える、は…。日本語を、完璧に話したいとか、需要が違うと思うんで、その学習者さんの需要に合わせた日本語レベルになってもらう、手助けができるようなことかなと思います。(I: 具体的にどうしたらそれができると思いますか。) いちばんいいのは個々に合わせて、個人的に授業して、こういうことがしたい、例えば、ただ趣味でやりたいとか、アニメが見たいからとか、日本で働きたいからとか、そういうことがあれば、たぶん教科書も違うと思うし、その、ニーズに合わせた授業がいる…のかな。

(将来目指す日本語教師像)

今、本当に思ってるというか、イメージだと、フレンドリーな先生になりたい。あんまり先生と学習者という、境目がほしくないなって思ってます。(I: フレンドリーで垣根がないような?) そうです。その、おんなじ感じで、接したい。友だちのような。いいのか悪いのかかわかんないですけど、でも、そのほうがいいなと思ってます。(I: どういう風にしたらそうなると思いますか。) 信頼はいるとは、思うんですけど、信頼の中でも、上から言うだけじゃなくて、自分もどンドン、参加するというか、自分から話しかけて、楽しい話を授業前とかにしたり、授業後とかにも話せるように、自分から動くことも大切になって。

また、「研修で身に着いた・学んだと思うこと」を追加で尋ねた。Aからは、「先生によって授業の方法が異なり、予習を課さない授業スタイルの場合は、特にクラス内での差があり、教師の力量で全員を救っていくのがとても大変だが、大切なことだと思った。」という話があった。そして、日本語教育に対して改めて「難しい」と思った気持ちを以下のように述べていた。

日本語教育難しいって、逆戻りしました。(I:後ずさりということ?) そうです。うわっ、って。ほんとに、さっきも言ったけど、レベルに差があるから、進んで、あ、うまくいってるかなと思ったら、その横で、ひらがな書けないからどうしよう、でも、じゃあひらがな覚えてきてねっていても、覚えてこなかったり。だから、ひとりだけ、ひらがなが読めないから、パワーポイントすら読めない。でも、進まなきゃいけない、っていうので、ちょっと、自分が、ほんとにその状況で、ずっとなったときに…っていう不安はすごい生まれました。でもそれをしないとたぶん、それをするのも仕事だと思うんですけど。それはちょっと、ありました。(I:それでも日本語教師やりますか。) やりたいんですけど、衝撃だったんですよ、想像してはいたんですけど。(I:ここまで差が開くこと?) そう、見たことがなかったんで、見たら、おおっと思って。

最後に、研修前に実施した PAC 分析のデンドログラムを見せ、インターン研修後のものと比べてどう思うか尋ねた。

うーん…。これ、前回のやつを見てたら、すごい完璧な人間にならないといけない、完璧な先生にならないといけないっていうのを、全体的にすごい感じるな…って思うんですけど、今回あんまり、そういう、「完璧」を意識するようなのはあまりないかなあって思います。どちらかというと、なんか、楽しく作りたいなあというのが強い?(I:それはなんで?) たぶん、完璧にはすぐはなれないから。完璧になるには、うーん、なんだろう…。完璧より楽しい授業のほうがしたいなああって、最近、思ったりすることは、ふつうに、多いと思います。あの、[派遣先]に行ったら先輩とかと話しても。その先輩も言ってらっしゃったんですけど、あんまりかっちりした授業よりは、楽しく勉強したい人のほうが多いし、そっちのほうが、お互いが楽しく、授業の時間を過ごすことができるから、完璧になろうとは、ならなくてもいいと思うよっておっしゃっていて、で最近そのことにも、けっこう考えたりしてました。(中略)でも、完璧じゃなくてもいいっていうのは、本当に、しないといけない限度は、あるじゃないですか。そういう、ちゃんとすべきこと。でもそれ以外はあんまり縛りつけなくてもいいのかなあ…。(I:この「不安」が消えたのは、[派遣先]に実際に行き行って教えてる人に会って、話が聞いたことがいちば

ん大きかった?)そうですね。(I:研修に参加し、教壇実習もして、感じたことも?)緊張もしたんですけど、前回よりはしてなかったというか、ちょっと楽しかったから、不安というより、楽しいほうがいくなって私自身思って、それは、多分…。だから、「なければならぬ」を、自分の中から多分、どけたっていか。たぶん、ちょっとだけ。もうちょっと、しっかり、楽しくできるようになったら、絶対「なければならぬ」を戻さないでダメだと思うんですけど、今は。(I:教壇実習楽しかった?)楽しかったです。(I:何が楽しかったですか?)何が楽しかったって言われたら、その、特定はないんですけど、でも、楽しかった。特定はないです。でも全体的に楽しかったです。ずっと。その空間に入れるのが。その日本語のクラスの空間にいるのが楽しかったんで。見れたり質問してもらったりしたら、「あー」とか「あーそういうことか」って反応がきたら、「がんばって」っていう感じになる。「がんばってほしい」って気持ちになる。「あー、そういえばそうだった」っていうことを言ってもらったら、がんばってほしい。(「そういえばそうだった」は、Aさんが説明したことに対して?)「これはどうだったっけ?」って言ったら、あの、答えを言わずに、「これはー?」みたいなことを言ったら、「あ、そうだ、そういえばこれだ」みたいなことを言ってもらった時に、なんか、がんばって、みたいな、応援、みたいな。(それが、楽しかった?)そうです。

4.2.4 インターン研修後インタビューのまとめ

インターン研修後の PAC 分析で挙げられた連想項目は、第三クラスター「マイナス」を除くとほとんどが「プラス」のイメージであり、Aがインターン研修での体験を前向きにとらえていることが示唆された。特に第四クラスター「笑顔」では、Aはアクティビティやペアワークを取り入れた活気のある授業の様子を具体的に想像しながら、より良い授業にするためにどうしたらいいかを追求しようとしている。研修後のインタビューでは、クラスター間の比較や全体の補足質問でも「楽しい」という語が学習者と自分の双方について頻出しており、学習者が楽しめる授業を考えようという姿勢と、自分自身が日本語教育を楽しんでいることの双方を示している。より良い授業を作りたいという思いは第一クラスター「アイデア」および第二クラスター「疑問」にもつながっており、授業見学を通して得た気づきや「自分もやってみたい」「学びたい」「吸収したい」という学習意欲、学習者からの疑問に正しく答えられるように自分自身も成長していきたいという向上心が表れているといえる。

一方、導入が苦手な緊張すること、パワーポイントを使った事前準備に時間がかかることなど、日本語を教えることに関する苦手意識や緊張感は第三クラスター

「マイナス」に集約された。また、補足質問の中では、パワーポイント作成のスキルや英語力に関する不安も語られていた。インターン研修の中で、具体的な苦手部分を見つけ出すことができたといえる。

以上、インターン研修後のインタビューでは、研修生 A がこの研修を通じ、苦手なことや緊張する場面はあるものの、日本語を教えることの楽しさを実感し、学習者のためにより楽しい授業を作るためにどうしたらいいか、授業見学や教壇実習を通じて課題を模索し、今後も学習者のニーズに合わせて教えられるように、フレンドリーで信頼される教師を目指して向上しようとしている姿を見出すことができた。

5. 考察

以上、研修生 A のインターン研修前と研修後の PAC 分析の結果をまとめた。その前後を比較すると、「日本語を教えるとは学習者のニーズに合わせた授業をすること」という教育観や、「学生と積極的に関わり、クラスを明るくする教師」という志は変わっていないが、日本語を教えることに対する意識や態度には変容が見られた。研修前には、日本語を楽しく学んでもらいたいという意気込みと漠然とした不安や緊張感が並存している状態で、教師として「しなければならないこと」「欠かせないこと」を自らに厳しく課す完璧志向が表れていた。A は研修の前に日本語教員養成課程の一環としての教育実習を経験しているが、一度の教育実習の経験は、日本語教育の楽しさと同時に不安や緊張も印象付けたようである。しかし、研修後には、日本語を教えることの楽しさを改めて実感し、より自信を深めている様子が窺えた。研修後も日本語教育に対する不安感や心配ごとが消失したわけではないが、研修前の漠然とした不安感に比べると、自分が苦手な部分、難しいと感じる部分がより明確に把握され、インターン派遣に向けて対処しようという姿勢が見られる。また、インターン研修後のインタビューで本人が研修前のデンドログラムを見て述べたように、研修前の完璧志向から、研修後は「完璧にはすぐはなれないから、それより楽しい授業をしたい」という方向に態度が変わっている。

総合すると、研修後の A は、日本語を教えるということについて、楽しさと難しさの双方がより解像度を上げてイメージできるようになっており、日本語を教えるということについて、その楽しさも難しさも研修前より具体的にイメージしたうえで、自分なりの目標を明確に持ち、そのために何をすべきかを考えることができるようになっていたと考えられる。

このような変容の要因の 1 つは、インターン研修に参加して経験を積んだことが

あると考えられる。A のインタビューには、派遣前研修中の意欲的・能動的な取り組みを窺わせる語りが随所に見られた。教壇実習で実際の学習者に教え、その反応に手ごたえを得ることによって自信を深めたほか、授業見学や学習者との交流を通じ、教師の役割や多様なティーチングのあり方など、多くのことを体験・観察することにより、日本語教師としての自らが目指すものがより鮮明になったと考えられる。

一方、A 自身が語るように、派遣先の現地で既に教えている「先輩」と直接話し、派遣先の実情について具体的な話を聞くことができたという経験が、完璧志向から楽しさ重視への変容に大きく貢献している。日本語教育人材の養成段階において、教育実習の経験と同時に、ロールモデルやメンターとの交流が有効であることを示唆している。

6. まとめ

本論文では、養成段階の人材は、日本語教育についてどのようなイメージを持っており、それについて教育実習はどのように影響するかを見ることを目的とし、インターン留学派遣候補生を対象に、インターン研修の前後に PAC 分析を行った。その結果、今回の対象者のケースでは、教育実習を含む研修を通じ、漠然とした不安が軽減され、取り組むべき課題がより明確になっていた。また、日本語教育についてのイメージは、完璧を目指す減点法のような考え方から、課題や改善点も自覚しつつ、まずは楽しむという考え方への変化が見られた。ただし、これらの変容は、漫然と研修や教育実習に参加したことによって得られたものではなく、本人の積極性や向上心のある取り組み、またロールモデルとなる先輩との交流も大いに貢献していると考えられる。

日本語教員の養成に対する示唆としては、研修や教育実習がより充実した意義あるものになるよう、研修・実習前において意識付けをしっかりと行うこと、教授技術の習得のみならず、自信を持って教授できること、自分の課題を明確にすることなど態度の面やピアの交流を支援することなどを意識して指導することが有効であると考えられる。

今後の課題として、調査対象者の数を増やし、多様なケースについて検討すること、また、フォローアップ・インタビュー等を通じて、研修生や実習生がその後どのように心境を変えたかを考察すること等が挙げられる。

参考文献

才田いずみ (2003) 「日本語教育実習生の授業への態度：現職教師との比較」『日本語教育論集』19, 1-5.

内藤哲雄 (1997) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

内藤哲夫 (2000) 「留学生の孤独感の P A C 分析」人文科学論集. 人間情報学科編 34: 15-26.

土田義郎 (2016) PAC-Assist2

<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>

(2023 年 1 月 6 日 13:28 閲覧)

統計フリーソフト「R」

https://statistics.co.jp/reference/software_R/free_software-R.htm

(2022 年 1 月 8 日 9:15 閲覧)

文化庁 (2022a) 日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議 (第 6 回) 配布資料 資料 1 有識者会議における検討の方向性に関する事項 (たたき台案)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/nihongo_kyoin/93787302.html (2022 年 12 月 29 日 15:19 閲覧)

文化庁 (2022b) 認定を受けた日本語教育機関の教員の資格制度 (イメージ) 【たたき台】資料 2

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/nihongo_kyoin/pdf/93793101_02.pdf (2022 年 12 月 29 日 15:19 閲覧)

謝辞

本研究の分析にあたり、金沢工業大学の土田義郎教授にご提供いただいた PAC 分析支援ツール PAC-Assist2 を使用した。

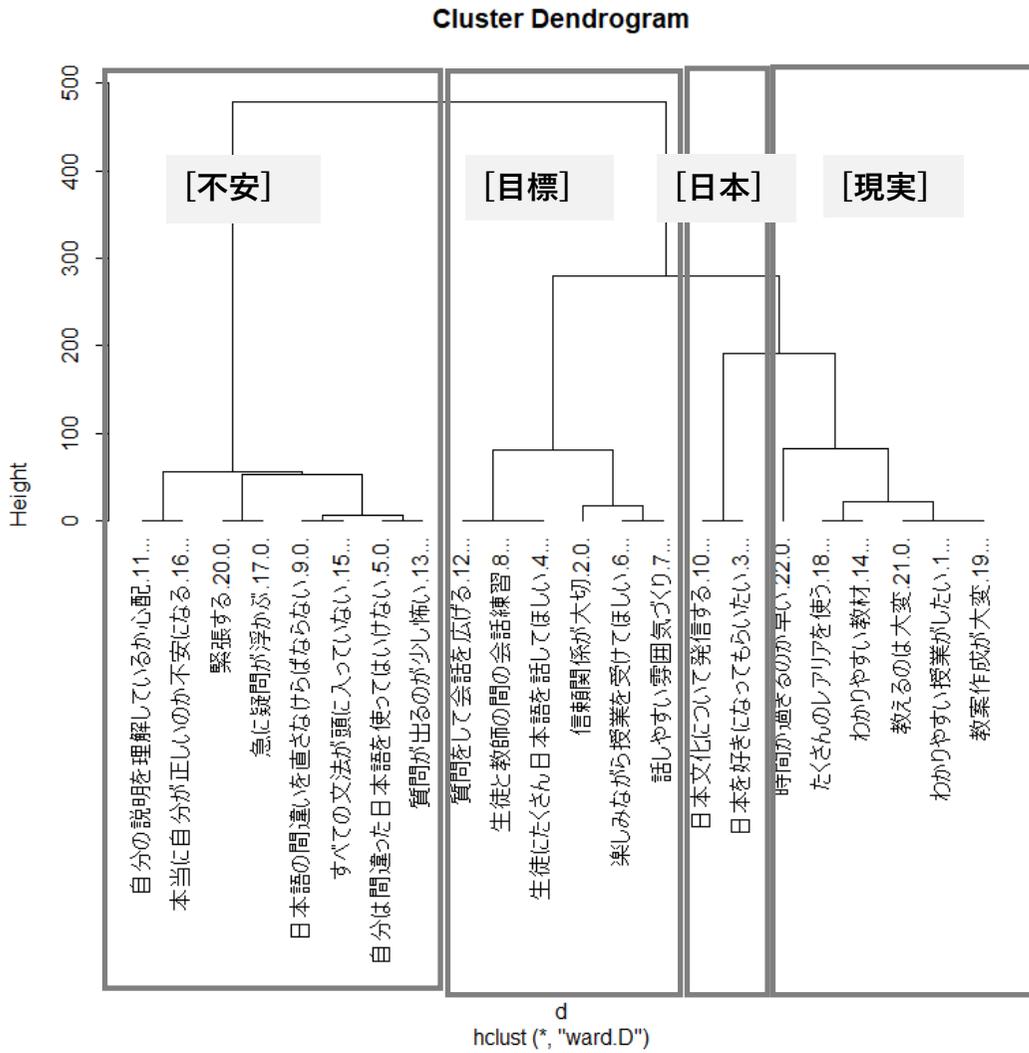


図1 インターン研修前のデンドログラム

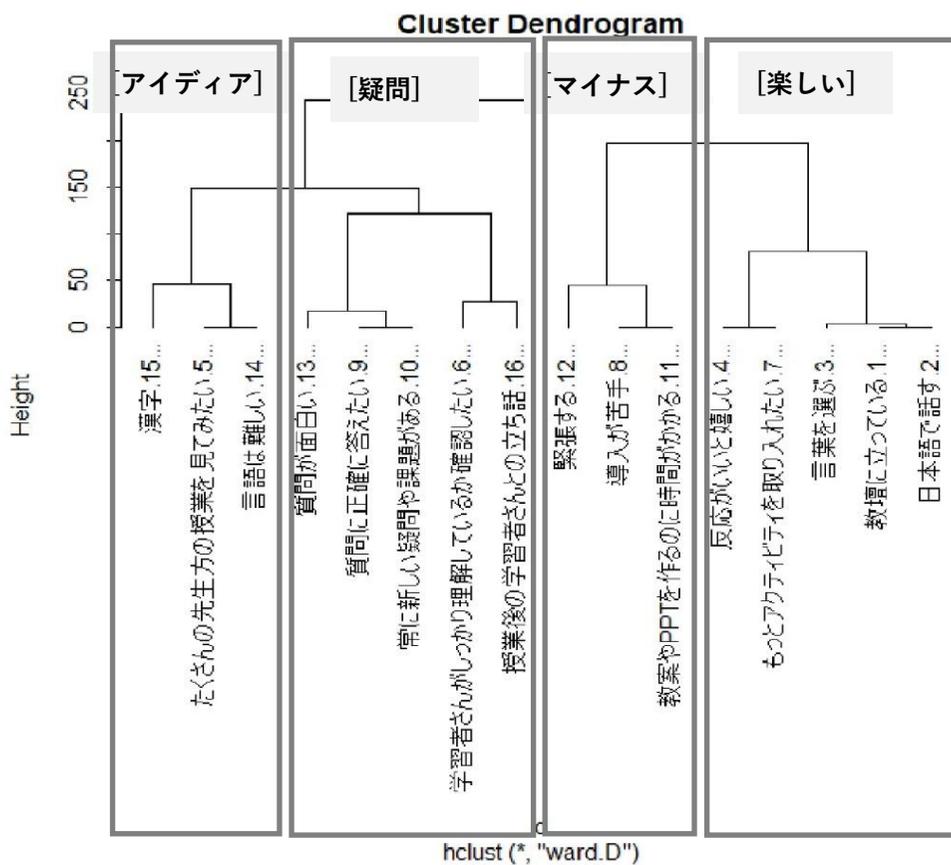


図2 インターン研修後のデンドログラム